

「講義要綱」におけるローマ字書きの本語について

POPESCU Florin

一. はじめに

「講義要綱」は、尾原悟氏が紹介されたキリシタン資料の写本である。現在残っているのはヴァチカン図書館にあるラテン語で書かれた「Compendium Catholicæ Veritatis」（「カトリックの真実の要綱」、以下は「ラテン語版」と略称する）とオックスフォード大学図書館にあるその和訳（以下は「日本語版」と略称する）の一冊ずつである。尾原悟氏が指摘されるように、イエズス会日本年報によるとラテン語版が完成したのが 1593 年で、日本語版が 1595 年の始め頃であるが⁽¹⁾、拙稿「『講義要綱』の成立について」では、現存のラテン語版は 1594 年もしくはそれ以降成立したもの、日本語版は 1595 年もしくはそれ以降成立したもので、両本が写本であることを指摘した。

原著者は当時のイエズス会副教区長ペロ・ゴメス(Pero Gomez)神父である。尾原悟氏、Üçerler 氏が指摘されるように、日本語版の 73 オ⁽²⁾には短い前書きがあって、そこに以下の記述がある。

日域ノ伊留^{いるまん}満衆ニ対シテ大智廣覽ノ師範、日本ノビセポロビンシアル伴天連^{ばてれん}ペロ・ガ
ウメス編立玉フ Catholicæ Veritatis ノ Compendio ヲ伴天連^{ことば}ペロ・ラモン日域ノ辞
ニ^{おはんぬ}翻訳シ終。(73 オ、通読のため、句読点、濁点、半濁点、振り仮名を付し、本語
に下線を付した)

以上の記述から、少なくとも 73 丁から始まり最後まで続く「Catholicæ Veritatis ノ Compendio」（「カトリックの真実の要綱」）を翻訳したのはイエズス会のペロ・ラモン(Pero Ramon)神父であることが分かる。

原典がラテン語で書かれており、ラテン語は宗教的教育で主に用いられる言語であったため、それらのローマ字文がラテン語で書かれることが予想されるが、ローマ字文を詳しく見てみると、確かにラテン語は多いが、その他にポルトガル語もあれば、ラテン語にもポルトガル語にもない語がある。

例えば、ラテン語の Subjectum (主体)に当たるローマ字表記を見ると、337 オに Subjectum と、338 ウには Subjecto が出てくる。1595 年天草版「羅葡日辞書」を見ると、この語はラテン語では Subjectum、ポルトガル語では Sujeito であって、Subjecto という語形はそれぞれの言語の要素をもちながらも、どちらにも存在しない形となっていることが分かる。

本稿では、ローマ字書きの言葉の実態を検討し、原語や表記法について考察してゆくが、次の性格の異なった 3 種類のローマ字文を考察の対象から除くことにする。

(1) ローマ字で書かれた日本語。日本語版のおわりに近い所にローマ字で書かれた日本語が数カ所に出てくる。

例。Temperança no parte ノ事 (本文、360 オ)

Humildad ni muco superbia no coto(本文、363 オ)

以上のような日本語の部分は、日本語版の成立を考える上では有用であろうが、本稿では対象とせず、下線を付したような部分 (いわゆる「本語」、次項参照) だけを検討する。

(2) 引用文。ローマ字表記の部分は全体的に二種類に分類できる。一種類は様々な宗教書や哲学書からの引用文である。もう一種類は、恐らく日本語に訳しにくくて、原語のままて用いられた語である。キリシタン資料の研究ではそれらの言葉は「本語」と呼称される。

引用文と本語の間にはいくつかの相違点がある。

- i. 引用文は完全な文で主語・述語がある。本語は、単語が最も多く、複数の語がある場合においても、述語的 (直説法、接続法など) の動詞をもたない。
- ii. 引用文は自立した文が圧倒的に多い。本語は日本語文中で一つの構成要素として機能している。
- iii. 引用文の前後に典拠の引用箇所が記述されている。本語にそれはない。
- iv. 引用文は一律にラテン語で表記される。本語では、ラテン語とは限らない。

本語における原語の統計をとるためには、引用文と本語を区別する必要があるため、以上の基準によって、全てのローマ字表記から、本語を抜き出した。判断に迷った例を二、三あげておく。

例。1. Aversio anima a Deo (ラテン語「デウスに対するアニマ (魂) の嫌悪」、191 オ)
この文節には独立性がなく、日本語文の中で一要素として機能しているので、本語として分類した。

例。2. Ego te baptizo. (ラ「汝を洗う (汝に洗礼を授ける)」、271 オ)
この文は、簡単なものの、自立した文であるから、引用文として処理した。

(3) 合字。全編にわたって、キリシタン研究において合字と呼ばれる本語がある。他のロ

ローマ字書きの語には省略があまり見られないのに対して、一部の言葉は全て省略表記されている。例えば、Propheta（預言者）が Pta と省略される。もともとは西洋で用いられる省略語であるが、同じようなものがキリシタン資料にも大量に見受けられる。これらの語の特徴は次にある。

- I. デウス、イエスキリスト、キリシタンなどの、キリスト教の中心概念を表す本語である。ローマ字表記の本語はむしろあまり親しまれていない概念を表すものが多い。
- II. 合字は語形に殆ど揺れがない。（24 種類の概念に対して、27 種類の語形がある）。ローマ字の本語は、一語に対して時に三、四種類の表記が出てきたりする。
- III. 合字の用例数は非常に多い。この 24 種類の概念の出てくる全例数は 2884 例に上る（一種類に対して平均で 120 例）。それに対して、ローマ字書きの本語は 580 種類で、全部で 759 例数にすぎない（一種類に対して平均 1.3 例）。
- IV. 他のローマ字書きの部分は本を 90 度回転させて左側から読めるように横書きで書いてあるのに対して、合字は漢字の一字分の大きさで、日本文字と同じ方向で書いてある。

以上の合字は興味深い特徴を持っているが、他の本語とは質の違ったものである。それらをあわせて考察すると、統計などに偏りが出る恐れもあるため、本稿では分析の対象外として、別の機会に検討することにした。

以上、三種類のローマ字書きの部分を除くと、合計で 759 例のローマ字表記の本語がある。とりあえず、単語の場合と数語で書かれている場合とを区別しないことにした。異なり表現は 580 種類ある。以下これらを分析してゆく。

二. 使用言語とその比率

日本語版の原拠がラテン語で書かれているため、ローマ字で書かれた本語がラテン語で表記されるのが最も自然に考えられる。なぜなら、引用文もそうであるように、原拠から直接書写するだけで済むからである。また、当時の科学の学習にはラテン語が不可欠であったから、西洋側では日本人の生徒にも専門用語をラテン語で覚えてほしかったに違いないからである。

しかし、明らかにラテン語で書かれた本語が大半を占めるものの、ラテン語と違った語形が多く見られる。それらラテン語でない語の多くはポルトガル語で書かれていることが分かるが、ラテン語の例数ほどは多くない。さらに、ラテン語にもポルトガル語にもない語形が

見いだされるが、その殆どが両方の特徴をもっている。以下はラテン語とポルトガル語の語形を基準にして、どちらの言語をもととしているかを判定しつつ分類した。

表 1 数量的な分布

原語	例数	比率
ラテン語	337	44.4%
ラテン語・ポルトガル語の共通形	91	12%
ポルトガル語	176	23.2%
その他	155	20.4%
合計	759	

それ以外に、「*appreciationis* シュイソ」(賞賛の審判)のような、ローマ字書きの本語と仮名書きの本語が混交する表現が見られる。ここでは、ローマ字で書かれた語だけを考察の対象とする。なお、362オに「κλυμντια」、330オには「*Mentis* чычтас」という例が出てくる。ギリシャ文字にキリル文字を交えた表記である。これらをローマ字に変換すると「*clæmæntia*」と「*mentis cæcitas*」に当たるらしく、ギリシャ語ではなく、ラテン語の言葉であることが分かる(しかし、ラテン語の正しい語形は「*clementia*」である。)ギリシャ語にないラテン語音を表記するために、[æ]には[ы]、[ci]には[ç]というキリル字が用いられたが、このような表記は初見である。なぜこの二語だけが違った文字で書かれているか分からないが、一応、ラテン語のものとした。

ポルトガル語がロマンス語であるため、ラテン語と全く同じ語形のものも多い。このように、ラテン語の430例の内91例が、ポルトガル語と共通する形である。しかし、これら共通形を個別に考慮に入れても、ラテン語の優位性は明らかである。

48ウには「*Romanos*」という語が、新約聖書の「ローマ人への手紙」の引用箇所に出てくる。他にも、この聖書の部分からの引用文があるが、通常は「*Rom*」と省略されて、一カ所だけに「*ad Romanos*」と、ラテン語の形が出ている。ラテン語の前置詞がなくなると、前置詞 *ad* が要求する対格複数の語形は、ポルトガル語の主格複数形と同じ語形となる。したがって、「*Romanos*」はラテン語の「*ad Romanos*」から前置詞の抜けた形であるか、それともポルトガル語と見なした「*Ephesino*」、「*Florentino*」、「*Constantinopolitano*」などのような固有名詞の複数形のポルトガル語であるか、断定できない。このような語は他に3種類あるが、表1では「その他」として扱っておいた。

三. ラテン語とポルトガル語で書かれた本語

当時の資料でラテン語、またはポルトガル語の正しい語形であることが確認できた本語は、形態論上次のように分類できる。

イ. 名詞

名詞の例が最も多く出てくる。例えば、ラテン語では *actus* (行為) など、ポルトガル語では *baço* (肝) などがある。また、形がラテン語とポルトガル語で全く一致する *clamor* (呼び声) などもある。こういう場合には「ラテン語、ポルトガル語共通形」と分類した (p.6 表 2)。

ロ. 名詞に相当する表現

一語ではないが、名詞に相当する表現も多い。例えば、ラテン語のものでは、*acceptio personarum* (個別の存在としての認識)、ポルトガル語では *bexiga do fel* (胆嚢)。共通の形は見られない。

ハ. 人名

聖人名、聖書の中に出てくる人物、著者名など、人名のローマ字で書かれた例はさほど多くない。例えば、ラテン語として、*Boethius* (中世の神学者)、ポルトガル語としては *Alberto Magno* (同じく中世の神学者)。聖書に出てくる人名の場合には、ギリシャ語が原型で、その形が両方の原語にそのまま使われているので、共通の語形が多い。例えば、*Esdras* (予言者の名前)。また、*Mat.* (ラテン語では *Matthaeus*, ポルトガル語では *Mateo* と、福音著者マタイの省略名) などのような省略表記は、キリスト教国では共通に用いられる。

ニ. 他の固有名詞

書名 (例えば *Deuteronom* - 旧約聖書の一巻の名称、共通)、国民名 (*Ephes.* エフェソス住民の省略名で、同時に新約聖書の一巻の省略名)、地名など (殆どがカトリック教会議の行われた地名を示している。たとえば *Vienense* (「ウィーンにおける」) は *Consilium Vienense* (ウィーンの会議) の省略である)。

ホ. 形容詞

単独で出てくる形容詞の例数も多い。たとえばラテン語の *episcopale* (「司教の」)、ポルトガル語 *posiuel* (可能だ) など。多くの場合、ラテン語の形とポルトガル語の形の相違点となるのは語末、もしくは語尾だけであるが、共通の語形も存在する。たとえば、*agente* 「作為的」という形容詞の場合、ラテン語の主格中性形はポルトガル語の形と一致する。

へ. 動詞

単独に出てくる動詞が十数例あるが、非人称法の形をとっている。ラテン語文法では非人称法には多くの形があるが、ポルトガル語では少ない。たとえば、ラテン語では *mortuus* (「死んだ」過去分詞で形容詞として用いられる)、*prævolans* (「先行して飛ぶ(もの、さま)」現在分詞)がある。ポルトガル語では、*permetir* (許可する、不定法)の一種類しかないが、出現例数が14で非常に多い。

ト. 副詞

副詞の例は、ラテン語に限られる。たとえば、*explicite* (明示的)などの例がある。

チ. 副詞に相当する表現

これらの複合表現はラテン語の文法的構造は透明であるが、ラテン語の神学において慣用されていることによって、抽象的な概念を示すようになる。たとえば、169ウではカウサ・ヒナル(目的因)についての論証には *finis cuius* (「何の目的」)と *finiscui*(*finis cui*の誤記「誰のための目的」)が出てくるが、これらの表現は対立させられることによって初めて意味を持つようになる。ポルトガル語で書かれたこのような表現は一つもない。

リ. 前置詞のついた表現

前置詞のついた表現がある。それらは形容詞や副詞に相当する。たとえば、*ab extra* (外より)。それらは難語ではなく、訳すつもりがあれば容易に和訳できる語である。ポルトガル語で書かれたこのような表現は見出せない。

以上のものを統計してみると表2のようになる。

表2 品詞別の分布

番号	種類	ラテン語特有の形(数)		羅語と葡語の共通形(数)		ポルトガル語特有の形(数)	
		異なり語	のベ	異なり語	のベ	異なり語	のベ
イ	名詞	96	143	14	22	68	85
ロ	名詞に相当する表現	69	90	0	0	20	22
ハ	人名	2	2	11	18	6	6
ニ	他の固有表現	0	0	16	21	7	8
ホ	形容詞	32	39	18	30	30	41
へ	動詞	13	14	0	0	1	14

ト	副詞	12	23	0	0	0	0
チ	副詞に相当する表現	2	3	0	0	0	0
リ	前置詞のついた形	20	23	0	0	0	0
合計		246	337	59	91	132	176

「異なり語数」は、表記上語形が異なる表現である。

表 2 から分かるように、ポルトガル語において格・性・数で変化する比較的単純な屈曲をもつ種類（イ～ホ）に関してはポルトガル語の形も存在する。相・法・時制などで変化する複雑な変化をする動詞に関しては、ポルトガル語では一種類しか観られない。副詞に関しては、変化はしないものの、難易度の高いものであり、またチ、リなどの複合表現は若干高度な文法の知識が必要であるためか、ポルトガル語の一例もない。

四. その他の本語

四一1. 他の本語の分類

拙稿「『講義要綱』の成立について」では、筆跡の特徴が原本の特徴をある程度厳密に反映している可能性が高いことを指摘した。そこで述べたように、日本語版におけるローマ字書きの筆跡が二種類に区別できるところがあり、これらの筆跡は原本のものの痕跡ではないかと考えた。殆どの記述が一つの筆跡（イ）によるもので、他の筆（ロ）は43、48～49、176ウ、211ウ～213オの途中まで、220オの一部、そして353オ以降最後（365ウ）までの部分にイとロの手が混在している。筆跡の特徴からは、おそらく、ロはヨーロッパ人宣教師、あるいはローマ字を書いた経験が豊富な日本人で、イはローマ字を書いた経験があまりない者で、日本人と見ても差し支えなからう。以下は、イ、ロの筆跡に言及するに当たっては、これらをあくまでも書写の上で見られるものとする。

まず、もとの言語を誤って表記したと思われる例をあげる。（ラテン語・ポルトガル語の正しい語形はできる限り当時の綴りを調べた。当時の語形が見つけれなかった場合には（）の中に現代語の綴りを入れた。）

まず、明らかな書き誤りとして、誤字脱字、そして区切りの誤りがある。拙稿「『講義要綱』の成立について」では、これらの例は洋語の理解度の低い書写者による模写を原因とする現象であることを指摘した。このような例は 42 箇所があり、ラテン語の綴りを誤ったものが 17 例、ポルトガル語の綴りを誤った例が 21 で、またポルトガル語からラテン語かのどち

らかの綴りを誤ったものが5例あるが、ここでは改めて検討しない。

以下検討する変化は、それぞれ数例が出てくるもので、誤写によるものとするより、何らかの形で原本にあった表記を反映しているものと考えられる。

四一2. ラテン語特有の表記の混同

全体におけるローマ字の筆記の稚拙さを前述したように書写によるものとして見ることにしたが、ラテン語特有の書き誤りについては、次のような点が見受けられる。

表3 ラテン語で表記混同が疑われる例

番号	語形	ラテン語の正しい語形	過誤	例数
1.	per participacionem	per participationem	ci-ti	1
2.	Judicio discucionis	judicio discussionis	ci-ti	1
3.	complecio	complexio	ci-xi	1
4.	Glosa	glossa	s-ss	1
5.	Mædia	media	e-æ	1
6.	Sævitia	sevitia	e-æ	1
7.	кльмьнтя	clementia	e-æ	1
8.	Vermis Conscientia	vermis conscientia \ae	格の混乱	1
9.	Eucharestia	Eucharistia	i-e	1
10.	implicete	implicite	i-e	1
合計				10

(1) 表3の例1~8については、中世ラテン語では、「e=æ, e=oe; f=ph, t=th, c=ch; i=i, c=qu, ci=ti, d=t, x=s, honor=onor, 子音重複などの混同は、ML〔Media Latina 中世ラテン語〕のほぼ全期を通じて見られる。」(国原吉之助氏「中世ラテン語入門」、p. 39)とされている。しかし、それらの混同の例は俗ラテン語、また各地域で話されたロマンス語の影響を受けたものであって、格調の高い科学書には少なく、ラテン語版には見あたらない。したがって、日本語版を作成したグループのラテン語知識のレベルは、ラテン語版の著作者のペロ・ゴメス師には相当劣ったものであるように考えられる。一方、翻訳者のペロ・ラモン師が修練長でラテン語を教えていたことはJ.F. Schutte氏によってまとめられた在日本イエズス会の名簿から知られていることで、それらの混同はラモン師によるものとは考えにくい。恐ら

く、これらの混同は翻訳・筆記の作業に携わった、ラテン語の知識があまり高くない協力者によるものであろう。

(2) 例 9, 10 に見られる i と e の揺れは、当時のラテン語資料には出てこないが、i と e、そして o と u の混同は当時のおけるポルトガル語資料に見られる現象である。

四-3. ポルトガル語特有の表記の混同

表 4 ポルトガル語の表記の揺れが疑われる例

番	語形	ポルトガル語の正しい表記	過誤	例数
11.	<u>Accam</u>	<u>acção</u>	ão-am	2
12.	<u>Suprema regiam</u>	<u>suprema região</u>	ão-am	1
13.	<u>Soperstiçam</u>	<u>superstição</u>	ão-am	1
14.	<u>discusa'</u>	<u>discução</u>	ão-a', s-ç	1
15.	<u>Conflagracam</u>	(<u>conflagração</u>)	ão-am, c-ç	2
16.	<u>Preseruacam</u>	(<u>preservação</u>)	ão-am, c-ç	3
17.	<u>Producan</u>	(<u>produção</u>)	ão-an, c-ç	2
18.	<u>Consiliabulo</u>	(<u>conciliabulo</u>)	s-c	1
19.	<u>Consilio Lateranense</u>	(<u>Conçilio Lateranense</u>)	s-c	1
20.	<u>Consilio Florentino</u>	(<u>Conçilio</u>) Florentino	s-c	1
21.	<u>dono, tımor</u>	<u>dono temor</u>	i-e	1
22.	<u>oleo</u>	<u>olıo</u>	i-e	2
合計				18

表 4 の例 11~17 は、当時のポルトガル語の正書法では ão と書くべきものであるが、本書では am、an、a' (反ティル、n、時折 m を省略するのに用いられる記号) となっている。当時の音価が厳密には分らないが、恐らく ão は軟口蓋鼻音を含んだ [aŋ] で、an と am に近似していたのだろう。

1595 年天草版「羅葡日辞典」には、ão に終わる語とともに、同じく正書法では ão に終わるべき語が am に終わる例が見られる。例えば、aprouaçam (正しくは aprouação・承諾)、adoraçam (正しくは adoração・崇拜)、aççam (正しくは ação・行為)、averçam (正しくは averção・嫌悪)。

語末の ão を am に換えた例に関しては、今までみた当時のポルトガル語書簡、フロイス神父の 1585 年の「Tratado」、Oliveyra と Gandavo のポルトガル語法に殆ど見あたらないが、J.J.Nunes 著「Compendio de Gramatica Historica Portuguesa」には中世ポルトガル語（15 世紀以前）にこのような例があったという記述がある。また、17 世紀成立とされている写本「Vocabulario da lingua Canarim com versam portugueza」⁽³⁾ にも、ão と am の混同する数例がみられる。

ルイス・フロイス著 1585 年成立のポルトガル語写本「Tratado」においては、以上の混同は見られないが、第一転尾動詞の直説法現在三人称複数形の場合、現代語では an に終わるところが ão に終わるようになっている。例えば、現代ポルトガル語では動詞 pregar（祈る）のこの形は現代語では pregan であるが、同書では pregão となっている。1536 年成立 Oliveyra の文法書、1574 年成立 Gandavo 著の文法書においても、同じ表記法が見られる。つまり、これらの書では名詞の語尾の「ão」だけでなく、以上の動詞の場合にも ão に統一され、am、an は用いられていない。それらに対して、「羅葡日辞書」、「Vocabulario...」では ão と am の表記揺れが見られ（後者では若干だが）、名詞の場合にも表記が統一されていない。

例 14~20 にみられる c と ç、また s と c の混同に関しては、s、z、ss、ç のそれぞれの混同は当時のポルトガル語の資料に比較的多い。c と ç の混乱は、母音 i や e の前にある場合ほぼ同音になるため、この時代によく見られるが、その他の母音に先行する c は破裂音なので、誤字と見なければならぬ。21 と 22 の例では、i と e の混同が見られるが、この混同はフロイスの「Tratado」にも見られる。ポルトガル本国でも、アクセントがかかっている音節に含まれている母音 e と o が i、そして u と表記される現象が指摘されている⁽⁴⁾。

以上の混同を全体的に見ると、一種類や二種類の混同が見あたる資料はあるものの、これらの全てが見られる資料はまだ管見に入らない。おそらく、ヨーロッパ人宣教師による混同と、日本人の協力者による誤字が混じり合っているのであろう。そういう表記法のポルトガル語が日本で用いられたポルトガル語の特徴を反映しているのであろう。どちらにせよ、日本語版のローマ字文の筆記は他の写本と比べてもかなり乱雑であると言えよう。しかし、この中には、c と ç、i と e などの場合は例数が少なく、かつ形の近似している文字が混同しているのだから、これらのどのくらいが現存版の書写者によるもので、どのくらいが原典の形を反映しているか分からない。

五. ラテン語が他の原語の影響を受けた例

以下の表現は、ラテン語とも、ポルトガル語とも違った語形のものであるが、語形から見ると、ポルトガル語、もしくはスペイン語の影響を受けたような印象を与えるものである。前章で取り上げた例とは違って、これらの例に見られる原語の語形との違いは比較的大きく、単なる近似する字の混乱による間違いではないようである。つまり、知識のない書写者によるものと考えより、相当知識のあつたはずの原本の筆記者によるものと考えられる。したがって、これらの例の中にも四一で論じた、誤字脱字、そして区切りの誤りはあるが、以下では模写によると思われる単純な過誤は改めて論じない。

表 5 ポルトガル語ともラテン語とも異なった語形の例

番	本語	例数	該当するラテン語	該当するポルトガル語	該当するスペイン語
23.	crudelidade	1	crudelitas	crueldade	crueldad
24.	autoridade	1	auctoritas	autoridade	autoridad
25.	damnação	1	damnatio	dano(danação)	dano
26.	excomunicaçao	1	excommunicatio	excomunião	excomunion
27.	complexam	1	complexio	(compleição)	complexion
28.	spiraçam	2	spiratio	(espiração)	espiracion
29.	aprobação	2	approbatio	aprouação	aprobacion
30.	præcipitação	1	præcipitatio	precipitação	precipitacion
31.	echo	1	eccho	eco	eco
32.	cæremo nial	1	cæremonialis	cerimonial	ceremonial
33.	justicia	2	justitia	justiça	justicia
34.	solercia	1	solertia	(solercia)	solercia
合計		15			

例 23 の「crudelidade」(残酷さ)の場合は、ラテン語の語形は「crudelitas」であつて、ポルトガル語は「crueldade」である。日本語版に出ている例は、ラテン語の語形をそのままに、接尾辞「-tas」をポルトガル語の「-dade」に替えている。例24も同様である。

これらの例はラテン語とポルトガル語の特徴を併せ持っているものである。現代ポルトガ

ル語にそれぞれに似た語形はあるものの、そのままではなく、ポルトガル語の正書法に順って変化・簡素化した形となっている。

例 24~29 では語尾だけはポルトガル語特有の~ão、~am になっている。ポルトガル語にラテン語が受け入れられた時、二重子音、二重母音の æ を単一にし、c, t に後続する黙字 h を削除し、語頭の s で始まる連続子音の前に e を添加するなどの簡素化が行われた。しかし、これらの例の場合には語幹は殆どラテン語のままに保存されているので、あるいは、筆記者は ratio·ração, oratio·oração など、一般的に使われるラテン語とポルトガル語の形態から類推して、語尾だけをポルトガル語風に換えたのかもしれない。

以下、まとまった例をいくつか取り上げてゆく。

五-1. l, r に終わるラテン語の第3転尾形容詞にあたる語について

表 6 l, r に終わるラテン語の第3転尾形容詞

	用例	例数	ラテン語	ポルトガル語	スペイン語
35.	General	1	generalis, e	geral	general
36.	supernatural	1	supernaturalis, e	sobrenatural	sobrenatural
37.	Vidual	1	vidualis, e	(vidual)	viudal
38.	Virginal	1	virginalis, e	(virginal)	virginal
39.	Injustitia irreal	1	injustitia illegalis	injustiça ilegal	injusticia ilegal
40.	Justitia particular	1	justitia particularis	justiça particular	justicia particular
41.	Theologia nãl ^(s)	1	theologia naturalis	teologia natural	teologia natural

表 6 にある例の共通した特徴は、全てがラテン語の第三転尾の形容詞に関係している。ラテン語の形容詞は三つの転尾に分けられるが、分類は、転尾の形式が名詞のそれぞれと近似しているのに基づいている。則ち、第三転尾形容詞は名詞の第三転尾と近似しているが、この部類の中にも、主格単数形が持つ文法的性の語尾の数によって、男性、中性、女性の三つの語尾をもつもの、男性・女性の共通したのと中性の二つの語尾をもつもの、そして全ての性に共通する一つの語尾をもつ形容詞に分類されている。

二つの語尾を持つ第三転尾の形容詞のなかに、名詞の語幹に接尾辞-alis、-aris をつけた形容詞があって、抽象的で高級な概念を指している。これらの形容詞の主格単数の語尾は男

性と女性の場合 [-is]と 共通するもので、中性の場合[-e]である。ポルトガル語では、これらの形容詞が流用される場合、主格単数の形で、性による変化をしない形容詞となる。前節で述べた如く、語幹が簡素化されることもあるが、ラテン語で変化する語尾「-is」、「-e」が必ず削除される。たとえば、「singularis,-e」はポルトガル語には「singular」となる。

表 6 の例は一見すると、それらの語尾の形からはポルトガル語に見えるが、それぞれの形は当時の資料に見あたらない。

例 35 の場合にはラテン語[generalis,-e]（「一般的」）はポルトガル語では語中の一部を落として[geral]となつて、[general]という形は軍隊の位を示す名詞としてしか使われない。日本語版で使われているのは「一般的」という意味である。しかし、この語形はポルトガル語のものではなく、単にラテン語の語尾を省略しただけである。例 36 の「supernatural」の場合には、ポルトガル語には「sobrenatural」の語形しかない。この語も、単にラテン語の語形にあった語尾を削除したに過ぎない。

また、例 39~41 に含まれている形容詞は、修飾される名詞がラテン語なのに対して、形容詞だけがポルトガル語風になっていて、形容詞だけが安易にポルトガル語風に換えられた可能性を示唆する。

五-2. 第2転尾の名詞や第1, 第2転尾の形容詞にあたる語について

表 7(現代語にしか見つからなかった語は () に入れた。用例に該当する形がある場合、「#」と記した)

	用例	例数	ラテン語	ポルトガル語	スペイン語
42.	gusto	1	gustus	gosto	"
43.	precepto	1	præceptum	preceito	"
44.	composito	1	compositus	composto	"
45.	defecto	1	defectum	defeito	"
46.	adoptiuo	2	adoptivus	(#)	"
47.	diafano	1	diafanus	(#)	"
48.	diuino e~e	1	divinus ens	(#)	"
49.	erronio	1	erroneus	(#)	"
50.	execratorio	1	execratorius	(#)	"
51.	heretieo	2	hæreticus	herege (#)	"

52.	imperato	1	imperatus	(")	"
53.	libertino concilio	1	libertinum concilium	(")	"
54.	medio	1	medius	(")	"
55.	osculo	1	osculus	(")	"
56.	primario	1	primarius	(")	"
57.	sortilago	1	sortilegus	(")	"
58.	tacto	1	tactus	(")	"
59.	temerario	3	temerarius	(")	"
60.	assertorio	1	assertorius	(")	"
61.	astrologo	3	astrologus	(astrologo)	astrologo
62.	apetito intellectiuo	1	appetitus intellectivus	apetito inteletivo	apetito intelectivo
63.	ceremonial præcepto	1	cæremoniale præceptum	cerimonial preceito	ceremonial precepto
64.	Christalino	1	Christalinum	Cristalino	Cristalino
65.	comminatorio	1	comminatorius	(cominatorio)	cominatorio
66.	supposito	1	suppositus	suposto	suposito
67.	hymnos	1	hymni	hinos	himnos
68.	nobilissimo	1	nobilissimus	nobilisimo	nobilisimo
69.	promissorio	1	promissorius	promisorio	promisorio
70.	metaphorico	2	metaphoricus	metaforico	metaforico
71.	præcepto	1	præceptum	preceito	precepto
72.	præcepto positiuo	1	præceptum positivum	preceito positivo	praecepto positivo
73.	speculatiuo	1	speculativus	(especulativo)	especulativo
74.	Spu' paracleto	1	spiritus paracletus	espírito paracleto	espíritu paracleto
75.	Spu' recto	1	spiritus rectus	espírito recto	espíritu recto
76.	humano consilio	1	humanum concilium	umano consilio	umano consejo

77.	puro homo	1	purus homo	puro homem	puro hombre
78.	acuto	1	acutus	agudo	agudo
79.	amaro	1	amarus	amargoso	amargo
80.	etnico	1	ethnicus	gentio	gentio
81.	desiderio	1	desiderium	desejo	deseo
82.	gaudio	1	gaudium	gozo	gozo
83.	somno	1	somnus	sono	sueno
84.	subjecto	1	subjectum	sujeito	sujeto
85.	vitulo	2	vitulum	bezerro	becerro
86.	otio	1	otium	ocio	ocio
	合計	53			

表 7 の語は、語末が[-o]となっていること（そして、誤写によると思われるいくつかの書き間違い）を除けば、ラテン語の形をしている。語末の[-o]はポルトガル語の特徴であるが、これらの語形はポルトガル語の資料にはみあたらない。幾つかの語に関しては、対応する語が「羅葡日辞典」などの資料に出てくるが、語形が違う。つまり、他の資料の中にある語形を当時のポルトガル語と見なせば、日本語版に出てくる語形は、ラテン語にもポルトガル語にもない独特な形となる。たとえば、例 83 では、日常的な概念である somnus（ラテン語、睡眠）に対して、ポルトガル語に sono という語があり、スペイン語では sueño があるが、somno という語形はない。

このような例は表 7 の 45 種類（のべ 53 例）あって、最もまとまった変化の種類となる。

これについては、これらの語形がスペイン語によるものではないかと疑われるので、まず検討してみる。以上の表の多くの語形がスペイン語に近いことは明らかである。実際に、ラテン語の言葉がスペイン語に採用されるとき、語形が殆ど変わらず、ラテン語にある破裂子音連続をそのまま受け入れることがあるので、ポルトガル語よりラテン語に近い場合がある。

例 ラテン語 *praeceptum* の pt は、ポルトガル語では *preceito* と p が脱落するが、スペイン語では *precepto* と保存される。

また、当時では、ポルトガル語で書かれた資料が比較的少なく、表記法がまだ統一されていなかったのに対して、スペイン語の書物は多く、表記の揺れが少ない。

表 7 の o で終わる例に関しても、これらの用例に該当するものが当時のポルトガル語資料

にあったかどうか分からない語が多いのに対して、スペイン語の書物ではこれらに因んだ形が簡単に見出せる。語形がポルトガル語と異なり、スペイン語に合致する例は最初の 42~46 の 4 例の場合に限られる。46~60 の例は、スペイン語の形に合致しているが、現代ポルトガル語にあるので、今回管見に入らなかった当時の資料にも出てくる可能性がある。例 61~72 は、スペイン語の形の方が用例の形に近いが、ラテン語にあってスペイン語にない二重子音、t, p, c に後続する h、二重母音 æ が出てくる。更に、スペイン語、ポルトガル語では語頭が s で始まる子音連続に母音 e が添加されることになっているが、例 73~75 の場合は、語形がスペイン語に近いが、語頭の [e] がない。以後の例 76~86 に関しては、ラテン語とは語末が違うが、ポルトガル語ともスペイン語とも違った語形である。

61~72 の例に見える表記の特徴は、J.J. Nunes 「Compendio de Gramatica Historica Portuguesa」によると、多くのラテン語がポルトガル語に取り入れられた時代には頻繁にあったが、キリシタン時代には揺れの多い時代はすでに過ぎていて、ポルトガル語になかったラテン語特有の二重子音 (pp, tt など) や二重母音 (æ, œ) が単一子音・単一母音に変わり、子音に続く h (ch, th, ph など) は省かれるようになっていた。ポルトガル語で書かれたキリシタン資料では、子音に関してはポルトガル語の正書法で進められた簡素化に従っていない例が若干見られるが、二重母音 æ は、ポルトガル語の文書の中で、明らかにラテン語として引用されている言葉以外はあまり見られない。一方、スペイン語に関してはアヴィラ・ヒロンの「Relacion de Japon」には、t, p, c に後続する h の例が少々見られるが、二重母音、二重子音がラテン語のままに残っている例はない。もちろん、教養レベルの高いスペイン語の書物では、正書法がしっかりしていて、以上のような揺れは殆どない。

確かに表 7 の例ではスペイン語に近い語が多いが、かりにこれらの例をスペイン語のものと見ると、ラテン語の特徴を残している語が多過ぎることになる。また、ラテン語の特徴をスペイン語やポルトガル語の単なる表記の揺れとすると、スペイン語になく、ポルトガル語にしか見られない揺れが生じていることになる。やはりこれらの例は、スペイン語を意図して表記されたものではなく、ラテン語の語形に基づいて、語尾だけを「-o」に換えられた結果としてスペイン語と似たいくつかの形が生じたと考えた方が良好だろう。

さて、語末だけがラテン語のものから「-o」に換えられたことに関しては、二つの解釈が考えられる。

- ア. これらの語形はラテン語として表記されているが、主格ではなくて、o に終わる与格・奪格の形を取っている。
- イ. これらの語形はポルトガル語の語形を意識して、語末だけが変えられた。

アについて考えてみる。本語は日本語文の中で機能しているが、その文中における実際の機能は限られていて、名詞、形容詞やそれらに相当する表現は殆どの場合、助動詞「なり」に続くか、それとも「と云」、「と云て」などがあとにあって、日本語の説明が続く。こういう場合には、本語を主格の形で表現しているのが普通である。また、羅列などの場合もある。例えば、245 ウに次の羅列の例がある。

「donu sapiëntiæ,二ニハ intelligentiæ 三ニハ concilis 四ニハ donu' fortitudinis 五ニハ sci~æ 六ニハ pietatis 七ニハ timoris domini」(知恵の徳義、二つには賢明さの【徳義】、三つには忠告の【徳義】、四つには強さの徳義、五つには学問の【徳義】、六には慈悲の【徳義】、七には神への恐怖の【徳義】)

この例のように、修飾される語（ここでは「donum」）が最初に一回だけ現れて、それを修飾する語はその語に下接して属格で現れることがある（この場合では「intelligentiæ」、「concilis」など）。しかし、このような例は少ない。それ以外の場合は、前置詞のついた表現の場合には、前置詞の要求する格を取る例がある。つまり、ラテン語の複数の語で作られた表現にはラテン語の文法の規則に従う語形を取ることもあるが、主格以外で表現されるべき語の場合でも、主格の形になることが多い。

逆に、羅列、前置詞などの格による束縛がない場合の例を見てみる。確実にラテン語の形をしている語を格で分類すると、殆どが主格である。例外として、220 オに *puro homine* (*purus homo*「純粋な人間」の与・奪格形)の1例と、163 オに *öipotentem*(形容詞 *omnipotens*「全能」の対格形)の一例とだけである。

したがって、羅列などの場合の数例とともに、日本語文の中の機能として変わった特徴もないに関わらず主格以外の形を取る例は以上の二例だけであり、全体の主格以外の出現例数が明らかに少ない。仮に *o* に終わる以上の 68 例を与格・奪格とすると、それらの例だけが異様に多いことになる。

さらに、例 63 (*ceremonial præcepto*) と 77(*puro homo*)の形を考えると、*præcepto* を与格・奪格形とすると、これを修飾する形容詞も与格か脱核の形を取らなければならない。つまり、例 63 の場合、*ceremonial* は同じ与格・奪格の *cæremoniali* の形を取らなければならないが、実際は取っていない。例 77 の場合、*homo* は主格であるため、これを修飾する形容詞 *puro* も同じく主格形 (*purus*) を取らなければならないが、この形を取っていない。仮に *puro* を与格・奪格の形とすると、今度は修飾される *homo* が同格の形 (*homine*) を取らなければならないが、実際にはそうでない。

このように考えてくると、表 4 で取り上げた語尾 *o* の例は与格・奪格の形ではないと判断

できる。

故に、これらの例の o に終わる形はスペイン語の語形でもなく、ラテン語文法による特殊な形を取っている語形でもなく、以上の解釈の「イ」が妥当であることとなる。つまり、これらの形は、ラテン語の語形に基づいているが、語末がポルトガル語風に換えられたものなのである。

五-3. スペイン語の影響について

前節の例がスペイン語の形であるかどうかについて論じた際、これらの例は全体としてスペイン語ではなく、ラテン語の語尾をポルトガル語風に換えたものであると考えた。しかし、以上の例に加わって、以下の例は確実にスペイン語の形となっている。

表 8 語尾「-dad」の例

用例	例数	ラテン語	ポルトガル語	スペイン語
1 ebriedad	1	ebrietas	ebriedade	ebriedad
2 insensibilidad	1	insensibilitas	(insensibilidad)	insensibilidad
3 humildad	3	humilitas	humildade	humildad
4 liberalidad	2	liberalitas	(liberalidade)	liberalidad
5 prodigalit(d)ad ⁽⁷⁾	1	prodigalitas	(prodigalidade)	prodigalidad
6 sobriedad	1	sobrietas	(sobriedade)	sobriedad
7 studiosidad	2	studiositas	(studiosidade)	estudiosidad
合計	11			

表 8 に見えるように、ポルトガル語の語形と異なって、スペイン語と一致する例があり、これらの例はスペイン語との関係が疑われる。

先述の如く、スペイン語はポルトガル語と同じロマンス系の言語であるため、多くの語形が一致するが、表 8 の例の場合は、ラテン語で形容詞を抽象名詞にする語尾-tas がスペイン語では-dad、ポルトガル語では-dade に変わる。

例。castitas (ラテン語、貞操) vs. castidade (ポ) vs. castidad (スペイン語)。

表 8 の例はスペイン語の語尾と同形の-dad を使った語形のものである。

日本語版の中でそれぞれの語尾に終わる例を表 9 にまとめた。

表 9 語尾 -tas, -dade, -dad 別の用例数

語尾 (言語)	異なり語数	のべ数
-tas (ラテン語)	10	13
-dade (ポルトガル語)	8	9
-dad (スペイン語)	7	11

表 9 から分かるように、この語尾に終わる語に限ってスペイン語の例数がラテン語やポルトガル語と同等である。しかし、これらのラテン語の例とポルトガル語の例が日本語版全体に見いだされるのに対して、スペイン語の例は 351v 以後の 14 丁に集中していて、全てが四一で指摘した、外国人によるロの筆跡であると思われる。

このように紛れもないスペイン語の形が出てくることを考慮に入れると、これまでポルトガル語と見なした語の一部が実際はスペイン語でもありうることになるが、明らかなスペイン語の語形は、語末が「-dad」となっている表 8 の例に限られる。これに対して、非常に強い造語能力をもつラテン語の語尾「-tio」(ポルトガル語では -ção、スペイン語では -cion)がある。日本語版のローマ字書きの本語の中では、「-tio」に終わるラテン語、そして「-ção」(または「-çam」, 「-çan」)に終わるポルトガル語がたくさん出てくるが、スペイン語特有の語尾「-cion」を持つ例は筆跡の種類にかかわらず、一つも見られない。

したがって、スペイン語の影響を認めるとすれば、これは本語の全ての種類に見られるような均等なものではなく、限られた部分に見られるものである。また、これらの「-dad」に終わるスペイン語を交えるのは、ロの筆記者の特異点であることが察せられ、更に検討してゆく必要がある。

六. おわりに

以上検討したことについて結論をまとめると、次のようになる。

- (1) ローマ字書きの本語で、判定可能な語ではラテン語が最も多く、ポルトガル語はその半分ほどあるが、明白な書き誤りを含めて両言語の語形と相違する語が二割程度ある。
- (2) 一見ポルトガル語の形をしている語で、実際は語末の二三文字以外ラテン語の語形であって、語末だけをポルトガル語風に換えられたものが多い。つまり、本語をポルトガル語で表記する意図が強く察せられる。
- (3) スペイン語の語形が数例見られる。これらは、模写された日本語版の原本ではヨー

ロッパ人の手になると思われるロの筆跡によるようである。訳者ペロ・ラモン師がスペイン人であったこともあって、スペイン語の影響が表す意味は更に考えてゆかねばならない。

ローマ字本語の検討だけでは、全体的な性格についてこれ以上の結論を出すのは早急にすぎであろう。ここではローマ字本語の状況を明らかにするとどめ、更に日本文字で書かれた本語について検討して、本語全体について明らかにする予定である。

(注)

- (1) 尾原悟編著「イエズス会日本コレジヨの講義要綱」、『キリシタン研究第 34 ～ 35 輯』教文館、東京、1998～1999、第一巻 p.453.
- (2) 丁数については、日本語版の 1 丁目はラテン語版における第二部である「De Anima」（魂について）の 41 丁目にあたる。丁番号が上部左側に伏してあるが、1 丁目には「1 - 365」と記述されている。ラテン語版と比べると、もともと日本語版の 365 丁以後にあったと推定される部分は恐らく 4 ～ 5 丁分程度であるから、丁番号は本書が現存の状態になってから付されたのではないかと考えられる。
- (3) “Vocabulario da lingua Canarim con versam Portugueza”（17 世紀前半成立とされる、筆跡によるコンカニ・ポルトガル語の辞書）に、たとえば *versam* と *versão* が存在するが、語末 *-ao* に終わる数百例に対して、これが *-am* になっているのは数例のみである。
- (4) J.J. Nunes “Compendio de Gramatica Historica Portuguesa”, A.M. Teixeira, Lisboa, 1960.
- (5) ティルはポルトガル語では *n*、たまに *m* と *u* を変換するのに使用されたが、ラテン語の文書にはこの例の「*natural*」を「*nāl*」と省略しているように、多用される語の場合に語中の文字をティルにして省略の形式がある。ラテン語版にもこのような例は多く見られる。
- (6) *t* が消されて *d* と訂正されている。単なる誤写ではなければ、一旦ラテン語で書き始めた語が、途中からスペイン語として筆記し直されたものか。

参考文献

1. 尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』大空社、東京、1997.
2. 尾原悟編著『Compendium Catholicæ Veritatis』大空社、東京、1997.
3. 尾原悟「解説 - Commentaries」大空社、東京、1997.
4. 尾原悟編著「イエズス会日本コレジヨの講義要綱」三巻、『キリシタン研究』第 34 ～ 35 輯、教

文館、東京、1998 - 1999.

5. 国原吉之助『中世ラテン語入門』南江堂、東京、1975.

6. Alvarez, Emmanuel "De Institutione Grammatica", Ioannes Barrerius, Olyssippone, 1572.

7. Nunes, Jose Joaquin "Compendio de Gramatica Historica Portuguesa", A.M. Teixeira, Lisboa, 1960.

8. Schutte, Josef Franz S. J. "MONUMENTA HISTORICA JAPONIÆ 1- Textus Catalogorum", Roma, 1975.

ポルトガル語資料

9. MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE GRAMMATIC DA LINGOAGEM PORTUGUESA (1536) BY FERNÃO DE OLIVEYRA" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2001.

10. MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE REGRAS QUE ENSINAM A MANEIRA DE ESCREVER EA ORTHOGRAPHIA DA LINGUA PORTUGUESA(1574) BY PERO DE MAGALHÆS DE GANDAVO" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2001.

11. MARUYAMA, Toru "KEYWORD-IN-CONTEXT INDEX OF THE GRAMMATIC DA LINGUA PORTUGUESA (1540) BY JOÃO DE BARROS" Nanzan University, Nagoya, Japan, 2002.

12. Buarque Da Holanda Ferreira, Aurelio: "Dicionario Aurelio", Editora Nova Fronteira, Rio de Janeiro, 1975.

13. de Figueiredo, Candido: "Novo Dicionario", Livraria Bertrand, Lisboa, 1939.

14. "DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM AC IAPONICVM" (『羅葡日対訳辞書』(1595)) 勉誠社、東京、1979.

15. Luis Frois "Tratado.", (Schutte, J.F. "Kulturgegensatze Europa-Japan (1585)", Tokyo, Sophia Universität, 1955) .

16. Barreto, Manoel の書簡: 1613年10月15日マカオ発、1614年10月12日マカオ発、1614年12月14日マカオ発。

17. Damião の書簡: 1564年京都発。

18. Diogo Ribeiro? "Vocabulario da lingua Canarim con versam Portugueza" (影印本) Junta de Investigações do Ultramar, Lisboa, 1973.

スペイン語資料

19. Avila Giron, "Relacion de Japon", Jap-Sin 49, pp.148-221(ヴァチカン図書館所蔵)。

20. 《Biblioteca de Autores Espanoles》第六卷, "Obras de Fr. Luis de Granada", Padilla, Madrid, 1944 年。

(ポベスク フロリン・博士後期課程)